

歴史の縁をつなぐ

〱都立富士高校と札幌農学校、そして僕〱

小倉 一純

僕が巣立った東京都立富士高等学校は、かつて東京府立第五高等女学校という、女子たちの学び舎だった。

その始まりの地は、新宿歌舞伎町かぶきちょうの喧騒の中に消えた旧コマ劇場のほど近くであった。

「淀橋区角筈よどばしくつのはず」と呼ばれたその一帯は、当時

は、雑木林と川と、数えるほどの民家と第五高女だけが佇たたずむ静かな土地だった。

終戦後には、巨大な歓楽街・歌舞伎町の誕生となるわけだが、当時の角筈の静けさからは、想像もできない変貌だっただろう。

今、その地に立つ石碑は、同窓会の人々の尽力によって、「東京府立第五高等女学校発祥の地」として静かに歴史を語りかけている。

戦火は学び舎を焼き払い、第五高女は新たな場所を求めた。そして見つけたのが、現在の東京メトロ・中野富士見町駅の裏手、見晴らしの良い高台だった。戦後間もない頃、女学校はそこに移転し、やがて男女共学の東京都立富士高等学校へとその名を変えた。

奇妙な縁を感じるのは、小学生の頃、僕がその富士高のすぐ近く、旧・有島邸の跡地に建てられた日本電信電話公社の官舎で、両親と暮らしていたことだ。

最近、ネット上で興味深い記録を見つけた。

なべよこ鍋横区民活動センター運営委員会による聞き取り調査の記録である。田口ぎん氏の言葉が記述されていた。それには「富士高の辺りは雑木林だった」、というタイトルが付けられている。

鍋横、つまり鍋屋横丁は、電々官舎からも近い活気ある商店街で、小学生の頃、僕は母に連れられ毎日のように買い物に出かけたものだった。東京三大横丁の一つといわれるその横丁は、当時の僕にとって小さな銀河だった。

その記録には、次のように記されている。

神田川は和田堀で大きく蛇行し、今よりも

ずっと幅広かったわね。今の地下鉄の車庫のあたりは、春になると蛇の抜け殻がそこかしこにあったの。

小学生の頃、写生の時間になると画板を下げてそこへ行ったけれど、人家なんてほとんどなくてね。ただ、今の本郷保育園の上に、東大建築科の奥田教授という方の瀟洒しょうしゃな洋館があつて、みんな競ってそれを描いたものよ。

信楽山も神田川からよく見えたから、よく描いたわ。

今の富士高校のあたりは本当にただの雑木林でね、町村金五さんという方がオーストラリアから種牛を輸入して、十数頭放牧していたのよ。そして、その牛たちを北海道へと送っていたわ。

（一部小倉による加筆あり）

この証言に出てくる町村金五という名前に、僕は確かに聞き覚えがあつた。

高校卒業後、僕は北の大地の北海道大学へ

と進み、五年間を札幌で過ごした。当時、北海道知事を務めていたのは堂垣内尚弘どうがきないなおひろだったが、町村金五はその一期前の知事である。自民党の強い後押しを受け、昭和四十二年までの十二年間、その重責を担っていた。

さらに驚くべきことに、町村金五は札幌市の生まれで、彼の父、町村金弥は、札幌農学校の第二期生だったという。札幌農学校は、その第二期生として、内村鑑三かんぞう、新渡戸稲造にとへ、宮部金吾といった錚々そうそうたる顔ぶれを輩出した、北海道大学の前身である。

町村金弥は、その学び舎でアメリカ式の先進的な農場経営を学び、日本の酪農れいめいきの黎明期を支えた先駆者の一人といわれている。

ここまで歴史の糸を辿たどると、町村金五が第五高女、そして富士高が建つ以前の高台の雑木林で牛を飼っていたという事実は、単なる偶然とはいいい切れない、何か運命的な繋がりを感じさせる。

なぜなら、冒頭で触れたように、僕が小学生時代を過ごした電々官舎は、有島成夫の旧邸宅跡地に建てられていたからだ。

成夫は、明治製菓の社長として辣腕らっわんを振るった有嶋健助の甥にあたる。健助に実子がいなかったため、その死後、成夫が家督を相続したのだ。

この有嶋健助は、小説家の有島武郎たけお、洋画家の有島生馬と従兄弟いとこの関係にある。

その有島武郎もまた、町村金吾の父、金弥と同じ札幌農学校の卒業生なのである。

町村金弥や内村鑑三、新渡戸稲造、そして宮部金吾らは、輝かしい第二期生としてその名を馳せているが、有島武郎は第十九期生として北の大地を踏んでいる。当初、有島は、当時札幌農学校きょうべんで教鞭を執っていた新渡戸が夫妻で暮らす官舎に身を寄せていたという。

旧・有島邸の跡地に建つ電々官舎で育ち、

町村金吾が酪農を営んだ高台に建つ高等学校に通い、そして自らも札幌農学校の精神を受け継ぐ北海道大学に進学をした――。これは一体、どんな巡り合わせなのであろうか。

一方、僕の記憶の中には、父が語る一人の人物の存在がある。

父と同じ電々公社に勤めていた山本氏という人だ。山本氏は、電々公社との間で起こったある労使問題において、自分の信念を貫き通し、自らの復権を勝ち取っている。

自分と同じように、片田舎で貧しい幼少期を過ごし、苦労を重ねてきた山本氏に、父は同じ男として、人間として、深い尊敬の念を抱いていた。

その山本氏の母校が北海道大学である。父にとって山本氏の存在が大きければ大きいほど、その母校である北大への、父の敬意もまた、僕の心に深く響いた。

それは、単なる学校名ではなく、困難に立

ち向かう勇氣と、自己の尊厳を守り抜く強さの象徴として、僕の心に鋭く刻まれている。

さらに最近、図らずも、新渡戸稲造の精神を現代に蘇らせようと制作された、ドキュメンタリー映画『新渡戸の夢』（野澤和之監督、二〇二四年七月公開）の外部サポーターという役割を僕は担い、微力ながらその完成に貢献することができた。

まるで、過去の偉人たちの魂が、時を超えて僕に何かを託しているような、不思議な感覚に包まれた。

実は、僕は三十一歳になるまで、母校の大先輩にあたる内村鑑三をよく知らなかった。その当時、僕は、岐阜と長野の県境も近い山中の私塾で自然農法と人生哲学を勉強していた。

そこで出会った伊藤孝一先生に内村鑑三についての史実を手ほどきされた。

先生は、横須賀のある私立大学で、事務長に次ぐ要職にあったが、訳あってこの私塾の塾長となっていた。若い頃からキリスト教を信じ、プロテスタントとしての道を歩んできた先生は、内村鑑三が提唱した、無教会主義を奉じていた。

この私塾で僕は初めて自分と母校北大との間にあるだろう、何かの“縁”を感じる事ができた。

都立富士高と僕と札幌農学校、振り返ればその間には単なる偶然では片づけられないものを感じる。深くて不思議な“縁”が確かに存在しているように思えてならないのである。